



父の遺言

千 字 万 感

株式会社ジェイテクト
取締役社長 安形 哲夫

42年前、大学を卒業し就職した時に父がボソッと一言が何となく心に残り、結果としてその一言を守ってきたように思います。それは、『世の中をスイスイ器用に泳ぎ渡ろうと思うな！俺は世の中をずっと見てきたけれど、そういう奴から溺れていった。余分な心配をせず真っ直ぐしっかき水を掻いていけば必ずどこかの岸に辿り着くから心配するな！』というものでした。

決して器用な質ではない私にとっては大変有難いアドバイスで、爾来、不器用と言われようが、やり過ぎだと言われようがひたすら水を掻き続けてきたと思っています。

大正5年生まれ父の世代は将に戦中派で、戦争、戦後の混乱の中、生命の保障さえ無い状況で働き、家族を支えてきた一生でした。自分の意志だけではどうにもならない中、ひたすら努力し毎日少しずつ進むしかなかった父の達観というか、いやそんな格好良い言葉ではなく諦念というべきものだったかも知れません。そんな父も戦争と肺結核という二度の死線を乗り越え、軍需技術者から田舎教師へと転身を果たし、最後は穏やかな晩年を故郷で過ごしました。

私自身も特段に能も無い人間ですが、時には人並みに欲に駆られる時もありました。でも、そんな時にはいつも父の言葉が思い浮かび、『待て待て溺れてはいかんぞ！』と思ひ止まり、また前を向くといった事が度々でした。社会人になった子供達にもこのお爺ちゃんの言葉を言って聞かせました。各々腹には落ちたようで、皆不器用に生きているので父親としては安心しています。しかし、口さがない次男からは、『親父が努力しているのは解るけれど、辿り着くのはいつも荒磯ばかりだね。』と言われ、『ほっとけ！荒磯だつてよじ登れば良いんだ！その上に花園が有るかも知れんだろ！』と言ひ返しています。

こんな他愛も無い家庭内の言い伝えをこのような紙面をお借りして書く気になったのは、先日大学の同窓会で若い女性が近寄って来られ『8年前の新人歓迎会で安形さんが言われたこの言葉をずっと守っています。』と言って頂いたからです。(当方はすっかり忘れていたのですが・・・)こんな言葉でも大切に感じて下さる方が居るんだ！思わず胸の中で父に報告しました。

私はといえば後数度水を掻けば岸に辿り着く年齢になってしまいました。どんな岸が待っているかは解りませんが、真っ直ぐ向いて水を掻き続けようと思っています。